第 2 号
2021 年冬

ヤクザル調査隊友の会通信

瀬切の森からの手紙

2

時には昔の話を (1)　2009 年　02
調査員からのクーコール (2)　鈴木 (山口) 真奈さん　04
調査メシ (2) ビーフシチュー　06
やくざる七つ道具 (2) 地図とコンパス　08
解き明かす！ 屋久島の生き物の暮らし (2)　10
やくざるなよんこま (2)　13
屋久島の森の住人たち (2) ハイノキ　14
24 時間戦えますか (1) 起床から出発まで　16
犬山より　18

2009 年

1989 年から始まったヤクザル調査隊。これまでさまざまなことがありました。過去のある年を取り上げて、その年の調査を振り返ります。

新型コロナウイルスの流行で、調査規模の大幅縮小を余儀なくされた、昨年 2020 年は、間違いなく、調査隊の歴史の中でもっとも危機の年でした。しかし、実は類似の危機を調査隊は経験しています。新型インフルエンザの発生から数か月後に行われた、2009 年の調査のことです。

この年の調査は、大川林道終点でのキャンプが、調査開始 2 日前に森林管理署から突如不許可と通知されるという、超弩級のトラブルから開始しました。あとから漏れ聞こえた事情はいろいろあったのですが、すでに交渉する時間的余裕はありません。急遽、四輪駆動車のレンタカー 2 台を予約し、調査隊自前の車とあわせて、5 台を確保しました。これで、尾之間集落にある調査隊の定宿、好和荘から毎日車で通う算段を付けました。

尾之間から大川林道終点へは、車で約 2 時間弱かかります。例年にできるだけ近い調査時間を確保するため、鬼のようなスケジュールが組まれました。4 時に起床し、45 分で朝食や準備を済ませて出発。途中、大川の滝でトイレ休憩し、大川林道終点に到着するのは 7 時ごろで、ふだんの年より 1 時間ほど遅い時間です。4 時まで定点調査を行い、5 時半ごろに全員が林道に戻ってきます。そこから同じ道を下って、尾之間に着くころには、7 時を回っています。居残りの食事当番が作ってくれていた夕食を食べた後、食事当番が片づけをしてくれている間に調査のまとめを行います。そのあと、全体ミーティングをし、「三岳友の会」(お酒を飲む集まり) を少しだけやり、11 時ごろ、就寝です。

5 台勢ぞろいして入山します。

尾之間温泉に行っている暇はまったくありません。当時、好和荘にはシャワーはありませんでした。標高 1000 メートルのテン場とは違い、下界は夜も暑い世界です。毎晩、臭く、暑く、寝苦しい夜を過ごしました。

まだお隣さんが深い眠りの中にいる午前 4 時半過ぎ、間もなく出発です。

車の中で眠りながら調査地と下界を往復していた一般の調査員は別として、睡眠時間 5 時間少々、連日 3 時間の運転は、確実に運転手の体力をむしばみました。とある運転手は往路にぼうっとして別の支線に入り込み、別の運転手は、疲労のあまり、好和荘では、食事の時以外、常に横になっていました。

それでもなんとかして前期の調査を終え、後期の調査員を迎えた日、別のトラブルが発生しました。調査員が集合して宮之浦で昼食を食べていると、後期に参加予定だった人から連絡がありました。鹿児島で体調が悪くなり、屋久島に行くのをやめて診察を受けたところ、新型インフルエンザと診断されたというのです。問題だったのは、その人は、集合日前日に鹿児島でほかの参加者 3 人と同じ部屋に宿泊しており、その 3 人は、すでに調査隊と合流していたのです。京都大学の本部事務にも相談し、とにかくその人たちは別室で過ごすようにという助言を受けました。後期の調査員が調査法についての講習を受けている間に、屋久島南部の宿に、片端から電話をしました。交渉は難航しましたが、最後には隊長の好廣さんが 2007 年まで調査隊が利用していた栗生の青少年旅行村に直接出向いてお願いし、栗生の診療所の先生にまで相談して、最終的にバンガローに泊めさせてもらうことができました。

彼ら 3 人は、講習が終わってから、すぐにほかの隊員から離され、インフルエンザの潜伏期間の 48 時間の間、隔離生活を送りました。好和荘から届けられたご飯を食べ、バンガローの窓から観光客を眺め、自分たちの生活を題材にしたすごろくを作ったりして、時間を過ごしたそうです。幸い発症せず、調査第 2 日目に、ぶじ、他の調査員と合流しました。

思い返せば、2009 年の新型インフルエンザは、世界中に広まって間もなく、弱毒性であることが判明し、流行が終息することなく忘れ去られました。新型コロナウイルスは、それよりもはるかに厄介な相手です。さて、今年のヤクザル調査は、できるのでしょうか…

（半谷吾郎　1993-2020 参加）

サルのメモ帖

調査地の大川林道はほとんどの区間が未舗装で、車高の低いふつうの車では底を打って走れません。屋久島にはレンタカー屋さんはたくさんありますが、林道を走れる四輪駆動車を持っているところは少ないのです。

クーコールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。各界で活躍する調査隊 OBOG に、クーコールを鳴いてもらいました。

鈴木（山口）真奈　2004-2006 参加

皆さん、ご無沙汰しております。2004 年、2006 年参加のマナティです。屋久島での思い出、今の生活、それらを通じて思うことについて少しだけ書かせていただきます。

私の屋久島の森の中での生活は、今でもとても思い出深く、鮮明です。たった 20 日程度の短い期間でしたが、他では経験できない貴重なものでした。待てども待てども出てこないサル、静かな森、巨大な屋久杉、数えきれないほどの星、川での水浴び、そしてヘッドライトの光のもと三岳を片手に仲間と交わした言葉。屋久島でのワイルドな経験や仲間との出会いを通じ、日本にも素晴らしい自然がたくさん残っていることを知り、世の中には色々な人がいることに気付きました。

気持ちはまだ当時のままですが、今はもう 2 児の母です。舞鶴という京都北部の海の町で元気いっぱいの男の子たちを育てながら、マイペースに英語の指導･翻訳の仕事をしています。海洋生態学者の夫と暮らすため、都会を離れ、会社を辞め、田舎で自分なりのワークライフバランスを模索しているところです。屋久島に通い詰めていたころには全く想像していなかったような生活です。気付いたらあっという間に大人になっていたという感じです。

母になり、私が感じていること、特に子供に伝えたいことがいくつかあります。まずは、実体験を大切にすること。私の中で屋久島の経験が何故あれだけ濃かったか、やはりそれが五感で感じたことだったからです。実体験はその人の素地をつくり、価値観や生き方に影響すると思います。次に、人とのつながりを大切にすること。特に経験を共有し、時間をかけて語り合った仲間は一生ものです。バーチャルな体験、バーチャルな仲間が当たり前になりつつあるこの世界で、実体験や、人と対面で過ごす時間はこれまで以上に価値が高くなっていると思います。

最後に、調査隊を通じて得たもう一つの財産として、多様な人との繋がりがあります。日本人は似た者同士が集まる傾向があると常々感じていましたが、社会人になると益々付き合う人の幅が狭まるように感じました。そんな中、調査隊の OB・OG とのつながりは大人になっても多様な人と触れる機会をつくり、狭くなりがちな世界を少しでも広げてくれていると思います。これからもたまに皆さんと交流が出来たらうれしいです。

畑で毎年恒例の芋ほりを楽しんでいるところ

仕事の HP: https://www.new-hatch.com
興味のある方はぜひ覗いてみてください。

サルのメモ帖

調査隊員には、マナティさんのように、ヤクザル調査でついたニックネーム、「ヤクザルネーム」を持つ人が多くいます。水族館に勤めている OB に、彼の職場でヤクザルネームで呼びかけたら、とても嫌がられました…。

調査メシ 2

食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘を、歴代の食当隊長が、レシピとともに語ります。

大坂桃子　2017-2020 参加

ビーフシチュー

山の上でのキャンプ生活は､8 泊 9 日に及びます。その間の食事メニューにはヤクザル調査隊伝統 (?) のルーティンがあり、何日目に何を食べるかというところまでほとんど決まっています。調査 1 日目の夜はポトフ、2 日目の夜は高野豆腐…といった具合です。そして調査 7 日目、山の上で迎える最後の晩餐は、決まってビーフシチューです。

キャンプ中は､毎日 2-4 人ずつが交代で食当(食事当番)に割り当てられ､調査に行かずに全員分の朝ごはんと夜ごはんを作ることになります。中でも、最後の日の食当は特別です。みんなより 1 日早く調査を終え、最後の一日を名残惜しむようにテン場で過ごします。もう 1 週間近く濃い日々を過ごし、思い出のたっぷり詰まったテン場です。

お昼ごはんを食べて少し休むと、夜ごはんの準備が始まります。材料やレシピは一般的なビーフシチューとほとんど同じですが、ひとつだけ決定的に違うことがあります。それは、ビーフシチューなのにビーフが入っていないことです。

キャンプ中は食料を買い足すことができないので、山に入る前に大量の食材を買い込み、それを計画的に消費しながら生活します。玉ねぎ、にんじん、ジャガイモは、大抵ひとつずつ新聞紙にくるんでおくなどの工夫をすれば、涼しい山の上で常温保存しても問題ありません。一方お肉の場合そうはいきません。牛肉という贅沢は、再び山の下・下界に戻っていくまでお預けです。

そこで牛肉の代わりとなるのが、ブロックベーコンです。ブロックベーコンは、袋に入れて冷たい川の水に浸しておくことで、長持ちしてくれます。調査隊員 28 人分、玉ねぎ 5 個、にんじん 11 本、ジャガイモ 7 個、そして 1 週間川の中で待ち続けたベーコン 1260g をようやく取り出し、最後の晩餐に向けた準備を進めていきます。牛肉が入っていないとは言え、このような事情からお肉に飢えている我々にとって、ベーコンの入ったビーフシチューはご馳走です。ガス缶をつけたストーブにコッヘル（屋外用の鍋）をのせて、じっくり煮込んでいきます。

最終日の調査を終え、みんながお腹を空かせて戻ってくる頃には、おいしいビーフシチューが出来上がっています。1 週間の調査を無事乗り切った異様なハイテンションの中、記念の集合写真を撮り、待ちに待った最後の晩餐が始まります｡おそらくほとんどの人が､ビーフシチューなのにビーフが入っていないことにすら気がつかないまま､「おいしい、おいしい」と平らげていきます。みんなでブルーシートの上に座り大きな輪になって食べるごはんは、それだけ格別です。こうして最後の山の夜を過ごし、目が覚めるといよいよ文明に満ちた下界へと戻っていくのです。

サルのメモ帖

ブロックベーコンに落ち着く前、ビーフシチューには魚肉ソーセージを入れていました。ある年の前期最終日、間違って後期分のソーセージも入れてしまい、シチューの鍋がぶよぶよに膨れた大量の魚肉ソーセージで埋め尽くされていたことがありました。

やくざるもの道具 2

山の中に泊ってサルを調査するのに、ヤクザル調査隊は様々な道具を駆使します。30 年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

地図とコンパス

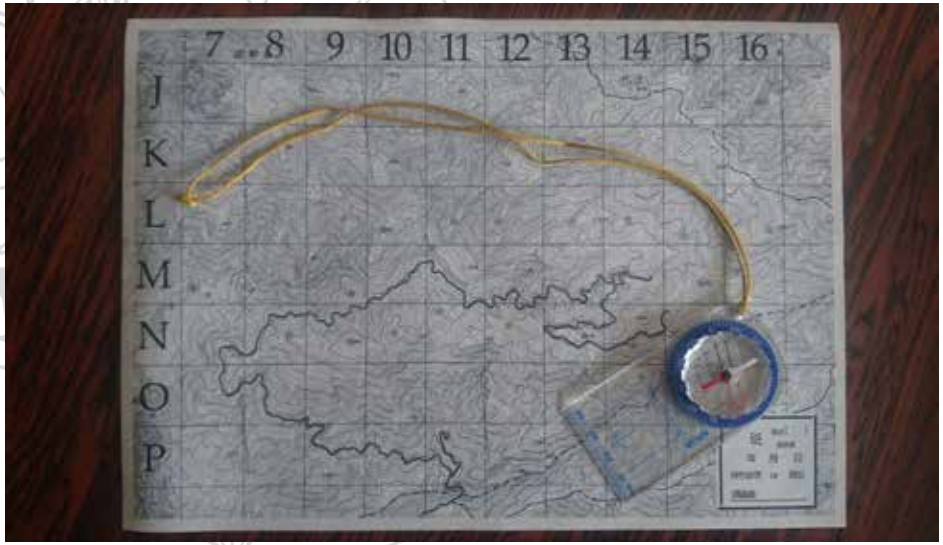
前回ご紹介した目印用の紐、タニポン 0123 は、森の中で局所的にどこに向かうべきかを示してくれます。ところが、目印の紐の通りに歩き、調査ルートを外れていないのに、定点から林道へ帰りつけないという人が、例年一人くらいはいます。定点は、場所によっては、調査ルートの三差路になっています。多くの定点はピーク上にありますから、定点から延びるすべてのルートが、局所的には、下り方向である場合があります。定点を出るときに、最初に見つけた紐をたどって、間違ったルートに踏み込んだ人が、「紐が続いているのだからこれは正しいルートに違いない」と思い込んで、そのまま突き進むと、ドツボにはまります。山を歩きなれたわたしの感覚としては、朝、定点までの道のりのほとんどが登りだったのなら、帰りにも登りばかりなのはおかしいと気付くはずだ、と思います。ところが、実際には、山歩きに慣れておらず、「目印の紐だけが頼り」という心理に陥っている調査員は、逆走していても、なかなか気づかないようです。

そこで、わたしたちは初参加の調査員に、このように指導します。まず、定点に着いたら、すぐに後ろを振り返り、自分がたどってきた目印の場所を確かめる。行きと帰りでは見える景色が全然違う。ぜいぜい言いながら定点に着き、5 分間寝転がって息を整えてから、さあどこから来たんだっけ、と振り返っても、もうそのときには分からなくなっている。歩いているあいだも、コンパスと地図で自分の現在地を確かめ、自分が進むべきなのは、北なのか南なのか、登りか下りか、大きな川はどちらにあるのか、確認しながら歩きなさい。

縦横無尽に歩き回るサルに一日ついて歩くには、研究者も道のない山中を歩き回らなければなりません。森の中でも使える GPS が普及した現在では、マニュアル車の運転のごとくアナクロのスキルになってしまいましたが、私より少し下の世代までの霊長類学者は、地図とコンパスだけで、「沢まであと 100 メートルくらいだし、さっき下りてきたあの尾根はあのあたりで少し西に折れているから、地図でいうとここで、つまり自分は今このあたりにいるのだな」というように、地形を読むことができました。それができなければ、データを取れないどころか、自分の命にもかかわるからです。

ヤクザル調査隊の定点調査者に求めているのは、そこまでのハードなスキルではありません。とはいえ、調査員全員に GPS を配るほどの予算はない調査隊にとって、20 年以上調査を続けてきた定点に、山歩き初心者がたどり着き、そこからぶじに戻ってくるため、コンパスと地図は、いまだになくてはならないものなのです。

（半谷吾郎　1993-2020 参加）



調査員にとっての最後の命の綱、地図とコンパス。サルは、こんなものがなくても、迷うことなく森の中を縦横無尽に歩くのだから、本当に尊敬に値します。

サルのメモ帖

毎年、調査前にメーリングリストを作り、持ち物について、経験者と初参加者のあいだで情報交換をします。姉妹で参加したとある調査員は、「授業で使う方の」コンパスを持っていくつもりだったことを、姉にメーリングリストでばらされていました…

解き明かす！屋久島の生き物の暮らし 2

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

ニホンザル *Macaca fuscata*

霊長目オナガザル科マカク属。400 種以上いることになっている霊長類の中で、ダンドツ、誰が何と言おうと、もっともかっこよくかわいらしい種。

単独オスの密度推定：ひとりでウロウロしているオスはどの位いるのか？

大谷洋介　2004-2014 参加

Otani Y, Yoshihiro S, Takahata Y, Zamma K, Nagai M. Kanie M, Hayaishi S, Fujino M, Sugaya K, Sudo M, Amanai S, Kaneda M, Tachikawa Y, Fukunaga Y, Okahisa Y, Higashi K, Hanya G (2013) Density of Japanese macaque (*Macaca fuscata yakui*) males ranging alone: seasonal and regional variation in male cohesiveness with the group. Mammal Study 38: 105-115.

サルの研究をしています、と自己紹介すると、サルって何頭くらいいるの？という質問を受けることがあります。この論文はそういった素朴な疑問に答えることの大変さが凝縮された一本と言えるかもしれません。

論文の趣旨は、森の中でしばしば目撃される「ひとりでウロウロしているオス（単独オス）」が何頭くらいいるのか、というものです。こういった動物の数を調べる研究は意外に大変で、動物の種類や場所に応じて様々な方法が編み出されています。北海道などの開けた草原ではヘリコプターを使ってシカを数えるといった大がかりな調査も行われていますが、多くの場合は地面に落ちている糞をひたすら数えるといった地道な調査になります。屋久島の鬱蒼とした森では上空から数えるというようなことは出来ませんから、やっぱり地道な調査を行うことになります。

ヤクザル調査隊では定点調査という、多人数が森の中に一日中座ってサルの出現を記録する方法が採用されています。日がな一日森の中に座り込むこの調査は楽しいもの（ただし蚊やヒルとの戦いを除けば、そして天気が良ければ）ですが、一日サルの群れに会えないこともしばしばです。そして、単独オスは輪をかけて発見が難しいのです。群れは何かと騒がしく、鳴き声を上げてお互いの位置を確認しながら森の中を進みます。しかし単独オスはとても静かで、独り言でもない限り声もあげません。定点調査で単独オスと遭遇する頻度は 1 日 8 時間森の中に座り続けて 10 日に 1 回会えるかどうかという程度です。一人でやっていたら 10 年かかっても十分なデータは集まらないでしょう。この論文の総調査時間数（みんなが定点に座っていた時間を全て足し合わせたもの）は 11,660 時間に上ります。これだけの時間数があってはじめて単独オスの密度を推定するという研究が成立したのです。これは通常行われる少人数のプロによる研究ではとても実現不可能なもので、そのためこの研究は大人数で一斉に調査するというヤクザル調査隊の特長が申し分なく発揮された例だと言えます。

このような調査の結果として、多い場所では 2.6 頭 /km^2 程度の単独オスがいることが分かりました（群れ密度は 1.25 群 /km^2）。これだけやってやっと「この地域にはこの位の単独オスがいる」と答えることが出来るようになったわけです。加えて、単独オスは低標高よりも高標高、秋よりも夏に多いことが分かりました。食べ物が豊富な低標高地域では群れ同士の争いが激しく、そのためオスが群れにいる時間が長くなる傾向にあるよ

サルのメモ帖

母系社会のニホンザルでは、メスは一生生まれた群れにとどまるものの、オスは生涯でいくつもの群れを渡り歩きます。また、日々の生活の中でも、メスはほかのメスや子供たちと群れの中心にいることが多いのに対し、オスはしばしば群れを離れて一人で歩き回ります。

うでした。また交尾期にあたる秋には可能な限り群れのメスと一緒にいることが有利に働くと推測されました。オスの振る舞いに関するこれらの考察は、私自身のその後の研究に繋がる重要なものでした。

余談ですが、この論文は私が大学を留年していなければ生まれていなかったかもしれません。この研究では夏のヤクザル調査隊に加えて、秋に追加調査を行っています。追加調査を実施した 2008 年、本来なら私は大学院に進学して修士論文の研究を開始していたはずでした。ところが単位が足りず留年した私は暇を持て余し、意気消沈した私を見かねたのか、半谷さんから屋久島での調査を提案していただいたのでした。さらに同じ頃、京都今出川通で調査隊 OB の座馬さんとすれ違い「ニホンザルやるんだろ？オスは面白いぞ」と言われた（すれ違いざまに本当にこれだけ言って去って行った）ことが、この調査とその後の私の研究活動の端緒になっています。この論文の共著者は私の人生に大きな影響を与えた人が目白押しで、そういう意味でも思い入れの深い論文となっています。

サルのメモ帖

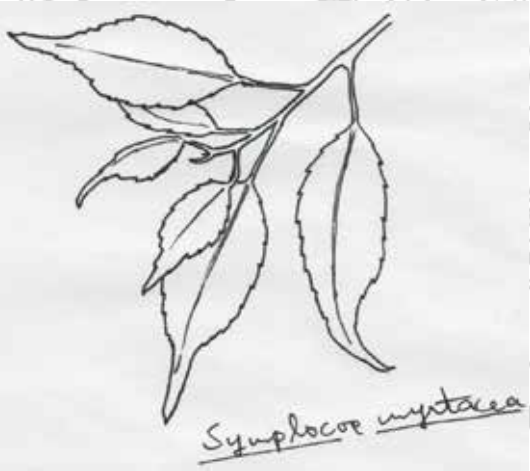
定点調査による動物の密度推定に重要なのは、定点から動物までの距離を正確に知ることです。ヤクザル調査隊では、ヒトリザルとの距離は歩測で測ることにしています。実習で、調査員の皆さんに試しに目測で距離を測ってもらいますが、はなはだ不正確です。

屋久島の森の住人たち 2

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象であるニホンザル以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

ハイノキ　*Symplocos myrtacea*

ハイノキ科の常緑小高木。近畿地方以西、四国、九州に分布し、屋久島は南限。暖地の山地に生えることが多い。



わたしにとって、屋久島を代表する植物は、ヤクスギでも、ガジュマルでも、シャクナゲでもありません。ヤクスギ林の林床をびっしり覆っている木、ハイノキです。

わたしが瀬切川右岸の原生林に作った 50 メートル四方の植生調査区で、太さの合計 (胸高断面積合計) の上位 3 種は、モミ、スギ、ツガでした。この森は、間違いなく針葉樹林 (ヤクスギ林) です。一方、スギはこの範囲内に 13 本生えていますが、太さの合計でスギの 25 分の 1 しかないハイノキは、推定で（というのは、小さい木は全数を数えるのが大変なので、一部しか数えていないからですが）、1720 本も生えています。第二位のヒサカキが 650 本ですから、ダントツの 1 番です。

というわけで、ヤクスギ林を歩くということは、ハイノキをかき分けて歩く、ということと、ほとんど同じです。ただでさえ雨の多いヤクスギの森は、一度雨が降ると、雨がやんでも、ハイノキの葉にたっぷり水滴がつ

定点のまわり、林床に広がる緑は、あれもこれもハイノキです。

いていて、やぶを通り抜けるとぐっしょりと濡れます。夏のヤクザル調査中なら、「朝露に濡れてさわやかな気分だ」などと自虐的に楽しめなくもありませんが、冬、湿った雪をまとったハイノキのやぶを通り抜けるのは、拷問に近いものがあります。

ヤクスギ林のニホンザルは、ハイノキの成熟葉も、新葉も、花も、果肉も、種子 (の中の胚珠) も、虫こぶも、全部食べます。これだけたくさんの部位を食べる植物は、他にはありません。これら全部を合計すると、ヤクスギ林のニホンザルの年間の採食時間の 17%を占めます。とくに重要なのは成熟葉で、果実生産の少ないヤクスギの森で、サルの生存を支える重要な食物になっています。成熟葉を食べる植物は、ほかに、ヒサカキ、ナナカマド、クロバイ、ヤマグルマなどがあります。それらは共通して、たんぱく質が多く繊維が少ないという特徴を持っています。ハイノキは、それら栄養的に優れた種の中でも、段違いにたくさん生えているために、サルにたくさん食べられているのだと考えられます。

ハイノキのやぶには散々苦しめられましたが、実は、ハイノキのことは好きです。おしりがふくらんで先がとがった葉のフォルムも好きですし、5 月に咲く、小さくておしべが飛び出した白い花も好きです。おまけに、サルの気分になって、林床にびっしり生えているハイノキが、全部食べ物だと思ったら、ヤクスギの森が、夢の国のように思えてきませんか？

（半谷吾郎　1993-2020 参加）

サルのメモ帖

森林の調査では、地面から 1.3 メートルの高さで太さを計ることが、標準的な方法です。1 番から 1000 番くらいまでの番号が印刷されたテープを木に貼り、太さを計測し、種名と一緒にノートに記録する「毎木調査」によって、森林の大まかな構造を知ることができます。

24時間戦えますか 1

バブル期の CM ソング「24 時間戦えますか」は、調査隊の替え歌の傑作「20 日間戦えますか」の元歌です。朝から晩まで、いろいろ詰まった調査の一日を紹介します。

起床から出発まで

まだ夜明け前の午前 4 時 45 分。テン場にアラームの音が一斉に鳴ると、ヤクザル調査隊の忙しい朝が始まります。眠くても二度寝をしている時間などありません。テントの同居人に挨拶を済ませたらすぐに寝袋から脱出し、ヘッドランプのあかりを頼りに集会場へ向かいます。夏の屋久島とはいえ標高 1052m にあるテン場は少し肌寒く、テントから出るときには朝露が背中を濡らすこともあります。

集会場には食当が早起きして用意してくれた朝・昼ごはんがあります。朝ごはんは鯖節の味噌汁とコッヘルで炊いたお米です。鯖節の味噌汁は調査期間中ほぼ毎朝食べる「ヤクザル調査隊の味」です（正直、飽きないと言ったら嘘になりますが・・・美味しいですよ！）。真ん中に置かれた鍋から味噌汁とお米を自分の食器によそって朝食をとります。集会場は狭いので、他の人にお願いしてよそってもらうこともあります。きちんと 2 つの食器に分ける人もいれば、ねこまんまにしてかき込む人もいます。

朝食を食べ終えたら各自お昼のお弁当を作ります。タッパーにお米を詰め、おかずをのせてふりかけをかければ完成です。それからテン場近くの沢で飲み水を汲みます。調査隊ではリアルな屋久島の天然水が飲み放題！

食料と水が揃ったらテントに戻り、昨夜デイバッグに詰めた調査道具を確認します。終わったらすぐに登山靴を履いて外で虫除けをします。防水加工のカッパを羽織って腕時計を付ければ、はい、ヤクザル調査隊の正装！トランシーバーのスイッチを入れ、地図とコンパスをポケットにしまって準備完了。外の集合場所へと急ぎます。髪を整えたり歯を磨いたりは調査地点に着いてからゆっくりできるのでここではパスです。

身支度をしている間にあたりは少しずつ明るくなっていき、外に集合する頃にはヘッドランプも不要になっています。ベテランの調査員は準備も早く、ストレッチをしながら全員が集まるのを待っています。私も出発の時を待ちながら他の調査員の様子を見ていると、眠気も忘れて「今日はサルを見れるのだろうか？」「どんな発見があるのだろうか？」と冒険への期待感で胸が高鳴ります。

そして、5 時 45 分。全員が集まると事務局長の半谷さんが口を開きます。「装備を確認してください。ノートありますか。地図ありますか。双眼鏡ありますか。筆記用具ありますか。トランシーバーありますか。水ありますか。」この声を聞きながらデイバッグの中をあさって、持ち物を再度確認します。

「準備ができたら出発してください。」と、合図が出たら同じ方向へと向かう人とグループを組んで出発します。こうして長くも楽しいヤクザル調査隊の 1 日が、夜明けと共に始まるのです。

（起床と出発は前期の時間です。後期は全体が 15 分早くなります。）

※ちなみに食当の朝

食当（3 人くらい）はその日調査に出る約 25 人の朝ごはんと昼のお弁当を用意しなくてはいけません。責任重大です。そのために調査に出るメンバーよりも 1 時間早く起きて準備をするのですが、まず起きるのが大変です。①眠い②寒い③静かにしなければいけない。同じテントの中でも自分だけ食当、ということも多いので他の人を起こさないようにしなければいけません。最小限のアラーム、もしくは体内時計で起き、寝袋を脱出し、誰にも気づかれないようにテントを脱出するのは至難の業です。集会場に着いたら前日のミーティング後に材料を投入しておいた鯖節の味噌汁を温め、コッヘルでご飯を炊きます。集会場もテントのすぐ隣で大きな音を出せないので相談は小声でします。1 時間がたち、ちょうどご飯が炊けるくらいの時間に調査員が起きてきます。みんなの朝食を見守り、調査員を見送ったら食当も朝食をとります。

（角田史也　2018-2019 参加）

サルのメモ帖

そもそも、なぜそんなに早起きするのか。定点調査はサルがやってくるのを待つ気長な調査です。ある程度長時間調査をしなければ、「サルが定点に出現する頻度」を正確に知ることができません。そこで、夜が明けて森を歩けるようになったら、すぐ出発するのです。

犬山より

お便り募集！通信を読んだ感想、調査隊への質問などをお寄せください。いくつかは、次号以降の本通信の中でご紹介させていただきます。

昨年 9 月に本通信創刊号をお届けしてからの 1 か月ほどは、今振り返ると、新型コロナウイルスの流行が、多少落ち着いていた時でした。その合間を縫い、10 月 8 日に、東京で、調査隊メンバーと地理情報システム (GIS) を使った研究の新展開について打ち合わせをし、10 月 25 日には岐阜と京都で同時並行・オンライン開催でヤクザル調査隊友の会サイエンスカフェを実施、11 月 5 日からは、大坂さんが始める調査の手伝いで、屋久島に行ってきました。

その後の感染拡大で、12 月 21 日のヤクザル調査隊総括会議は、オンラインでの開催を余儀なくされました。オンラインでも議論は成立しますし、全国 (…どころか、サイエンスカフェではアメリカから参加してくれた調査員も！) から気軽に参加してもらえるのは、すばらしいことです。とは言え、東京や岐阜で、こっそりこじんまりと、調査隊メンバーと飲みながら痛感したのは、ほんとうに楽しいのは、やっぱり実際に会うことだということでした。

そして、オンラインではデータは決して取れません。どうか、感染が収まって、今年の調査がぶじできますように。それまでは、みなさんとリアルでお会いするのはがまんです。

今年の寒さは格別です。どうか皆さんも、風邪などひかず、コロナにもインフルエンザにもかからず、お元気でお過ごしください。

本号から始まった連載、「時には昔の話を」と、「24 時間戦えますか」のロゴは、ヲトメさんこと、細垣彩加さん (2004 年参加) に作っていただきました。夏・冬号交代で掲載します。

ヤクザル調査隊友の会通信「瀬切の森からの手紙」第 2 号
2021 年 1 月 22 日　発行
発行者：ヤクザル調査隊事務局
住所：484-8506　犬山市官林 41-2　京都大学霊長類研究所
ホームページ：http://yakuzaru.php.xdomain.jp/
メールアドレス：hanya.goro.5z@kyoto-u.ac.jp
編集：半谷吾郎